

古代寺院の灯籠 ～山代郷北新造院跡 松江市矢田町

林 健亮

灯籠は、神社の参道などで見かける石造物。灯明を点し、足下を照らすものです。出雲地方では、来待石製の出雲石灯籠がよく知られていますが、今回は、古代寺院の灯籠のお話です。

松江市矢田町の山代郷北新造院跡(来美廃寺)は、奈良時代のお寺の遺跡です。この遺跡では、2つの塔跡や三尊像を安置した金堂跡などが発見され、建物の基礎部分などが保存され、公園整備されています。この公園の中心にある金堂跡の階段の前には、直径30センチほどの丸い印が表示されているのですが、これはいったい何でしょう。

山代郷北新造院跡は、天平5(733)年の年記を帯びる『出雲国風土記』に記されたお寺の跡の一つと考えられています。平成8年から13年にかけて発掘調査を実施し、当時の瓦や土器などが出土し、奈良時代のお寺の様子がわかってきました。

さて、冒頭の丸印には「灯籠の痕跡」と表示されています。調査時には、土器や瓦片などが入った穴として発見され、金堂の正面、参道のど真ん中に位置していることから灯籠の跡と考



史跡公園内の「灯籠の痕跡」の表示と茶臼山

えられました。調査当時、それは当然「石灯籠」だったと思っていたのですが。

現在の石灯籠は台座の上に竿石を据え立て、その上に灯明を点す火袋などの部材を重ねる構造になっています。全てを石で作るので、非常に重たいはずですが、発見されたのは土に掘った穴。台座の上に竿石を据え置くのではなく、竿石を直接土中に埋め立てたのでしょうか思えません。特に頭部が重い構造の石灯籠が、はたしてこれで保たれるのか、傾いて倒れたりしないか、当時から疑問に感じていました。

近年、各地で発掘調査が進展し、灯籠の調査例も増えています。三重県の佐野廃寺や上野廃寺、静岡県遠江国分寺跡や広島県三次市の寺町廃寺などでは、やはり灯籠を立てた穴が発見されていますが、これらは、木製の灯籠だったと考えられています。木製であれば穴に埋め立てた構造も納得できます。どうやら、山代郷北新造院跡の灯籠も木製だったようです。



現在では目にすることない木製の灯籠は、いったいどんな姿をしていたのでしょうか。古代の木製灯籠はまったく残っておらず、そ

発掘調査では、灯籠の竿石が抜き取られ、その穴の中に土器や瓦が落ち込んだ状態で発見された。

の形状はわかりませんが、古代の木製灯籠はまったく残っておらず、柔らかく暖かい光を放ったことでしょう。
(島根県埋蔵文化財調査センター 調査第一課長)